

ウサギの微笑み

中嶋 正敏

職場の近くに動物の病院があり、「かけがえのない家族の一員」を大事そうに抱えて外来窓口を訪れる人の姿を毎日のように見かける。とても恵まれた環境で日々を過ごしているものと想像するに難くない。私自身は研究という仕事から、専ら植物を扱っている。しかし、それでも必要に迫られて研究用の動物を扱わねばならない局面に時々は出くわす。そ

の必要性に関する詳細は紙面の都合上割愛するが、実験動物はデータの信頼性の維持や向上を狙って匹数多く、一斉に飼育されることが多い。そして、C6や3A―8などと機械的に名付け、混ざっても判るように動物のからだには目印をつける。

研究が終了すると、こうした動物の末路は一般的

に良い受け皿が期待できない場合が多い。極めて微妙な問題を含むため、その表現にはことさら慎重を期する必要があるのだが、担当の学生さんには飼育を開始する度に、「できるだけ感情や思い入れを持たないように」と誠に不本意ながら伝えることにしている。それでも、日々の飼育の中で心が通い合うのか、自然と情が移ったりしてとうの昔に研究は終わったのに別れが辛くてなかなか……などという事態に至ることもしばしばある。血の通う人としては、極めて自然な感情の流れであろう。

そうした事情を汲み、幸いにも処分を免れてどこか別の場所で飼育してもらえなくなった動物がこれまで何匹かいた。見かけは何も変わらないが、実験動物が愛玩動物になった瞬間である。そんな時は、動物たちが新しい場所で幸せに暮らすことを切に願いつつ見送るのだが、次第にそのことは忘れ、

植物を相手にする日常の生活に無意識のうちに戻って行く。こうしたことを何度か繰り返してきた。

最近、送り出した動物のその後の様子がつぶさに聞かえてくる、という点で初めての体験をした。つまり、子どもの通う学校にお譲りしたのである。しかし、その動物は新しい環境として用意していたせつかくの広い畜舎も「〇〇に小判」で身動きせずじつとしたままであった。加えて、子どもたちにもこの動物の好物を問えば、皆、口を揃えて返ってくるはずのニンジンにも全く興味を示さなかったそうである。子どもたちの目にはなんと不自然に映ったことであろう。狭い檻の中で、日々人工飼料のエサ箱をつつき、ふてぶてしく太っていくそれまでの環境との格差はあまりにも大きかったのである。

最近何かと「原点に戻り〇〇〇らしさを取り戻そ

う」などと声高に叫ばれる人の世であるが、この動物も確実に「らしさ」を喪失していた。新しい生活の場となった畜舎では、毎日子どもたちの黄色い声が溢れ、ニンジンや干し草を手づから頂戴することに慣れるにつれ、日増しに「らしさ」を取り戻していく様子を伝え聞いた。私にとってこの体験は、努めて気を回さないようにしてきた方面に目の焦点をハッキリとあわせるよう促されたと同時に、日常レベルで至極当然の発想や感情の価値に改めて気づかされることになった。敢えて教育的な表現を試みるとすれば、『動物が次第に「らしさ」を取り戻す過程について、明瞭な「変化」として捉える体験の場を子どもたちに提供した』とでも言えば、少しはお叱りを免れるのかもしれない。

後日、「なぜこの動物が子どもたちのもとへやってきたのか」という点について、子どもたちにも理

解できるような平易な説明を求められ、私は手紙を書くことになった。その中には、なぜその動物は「らしさ」を喪失していたのか経緯を交えて説明を加えるとともに、「私にとってその動物はなぜ必要であったのか」をしつかりと伝えたい欲求に駆られた。研究の面でこの動物は、極めて有効な情報を提供してくれたが、その事自体は動物自身には何ら幸せをもたらすのではなかったであろう。しかし、多くの子どもたちから愛され、「らしさ」を回復した事までをトータルして考えるならば、およそ実験動物が辿る平均的な運命と照らし合わせこの上なく幸せなケースに行き着いたものと信じたい。

ここで動物実験の是非を論じるつもりはないし、他方、この体験をもって、「だから子どもたちの周



辺環境も……」などと押しつけがましく結ぶつもりも毛頭ない。ただ、今でも日々の燦々とふりそそぐ陽の光を浴びながら、大勢の子どもたちに囲まれて暮らす当該の動物のいきいきとした様子を子どももの口から伝え聞くたびに、当時飼育担当であった学生

さんにもその状況を克明に伝えることで、なんとともすがすがしく、そして、心地よく感じる時間を共有させてもらっている。沈黙の日々を過ごしてきた動物がこちらを向いてかすかに微笑んでいる姿が私の脳裏には浮かぶのである。

(東京大学)

温かい食卓を求めて

村田 裕子

今年四月、私は病気で入院生活を送った。自宅近くのS大学病院での入院生活は、設備や看護が行

き届き、まるでホテルに長期滞在しているようにはばらしく快適であった。もちろん、食事もおいし